



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.21

「みなとびあで絵を描こう」みなとびあ大賞（こども部門）和田隆さんの作品

■「帆樫成林」とは？

帆柱が柱のように多く立つ様子を表した語、人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

■CONTENTS

特集1 地名と歴史	P.2~3
特集2 第7回むかしのくらし展 「お店やさん—昭和のお買いものくらし—」	P.4
常設展示室から 日本海をはさんで友好を育む四郷市の風景	P.5
おすすめの— 写真でつづる開港界隈 今、少しむかし	P.5
みなとびあ 研究notes 決をめぐる研究課題—堀・船・商	P.6
経典日記 早稲時習之	P.7
収蔵資料紹介 木下英一館「報時塔」	P.7
巻頭と巻末の— ハロゲンランプ	P.8

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.21

帆樫成林

—はんしやうせいりん—



■帆樫成林「はんしやうせいりん」vol.21号
■編集発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区南一宮町2-10
■印刷/株式会社博報堂

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象 参加費
11月6日土・7日 14:00~15:00	むかしのくらし展関連プログラム お買いものごっこ	はかり売りなど、むかしのお買い物をたいけんします。	不要 無料
11月13日土・14日 14:00~15:00	砂絵をつくらせよう	新潟の砂を使って砂絵をつくります。	不要 無料
12月5日土 14:00~15:30	木の葉のキャンドルスタンドづくり	いろいろな木の葉を使ってキャンドルスタンドをつくります。	必要 (11/25d) 小学生以上15名 200円
12月11日土・12日 14:00~16:00	石版画の年賀状をつくる	石版画で手作りの年賀状をつくります。	必要 (12/3d) 小学生以上10名 200円
12月19日土 14:00~15:00	蒲原のむかし話	新潟に伝わる昔話を語り部から聞きます。	不要 無料
12月23日木 11:00~13:00 (もちつきは別途)	もちつきをしよう	臼と杵を使った昔ながらのもちつきをします。かみしばいも見れます。	不要 無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。ど切は必要です。プログラムは予定となっております。詳細は、当館までお問い合わせください。

講座 イベント

大人向けモノ作り講座「ワラゾウリを作る」(全2回)

ワラ細工の名人、黒崎民具保存会のみなさんの指導のもと、ワラゾウリ作りを体験します。

【会期】2010年11月27日(土)・12月4日(土)の
2回連続講座 両日とも14:00~16:00

【会場】本館1階たいけんのひろば
【定員】両日参加できる16歳以上の方15名
【申込】必要(11/14必着)電子メールまたは往復はがきに、氏名・住所・連絡先電話番号を明記の上、当館「ワラゾウリ係」までお申し込みください。

参加費
無料

みなとびあ 平成22年度くらし探検講座

博物館資料と古写真で探る「まちのくらし・むらのくらし」各回ごとに、テーマに即したなつかしい生活道具からライフスタイルの変化を考えます。

【日時とテーマ】11月14日(日) 13:30~15:00
「下駄と下駄履人」(森学芸員)
12月12日(日) 13:30~15:00
「町並みと住生活」(岩野学芸員)

参加費
無料

【会場】本館2階セミナー室 【定員】15名程度 【申込】不要

博物館を支えるモノ・もの

ハロゲンランプ

常設・企画展示室で使っている照明です。家庭では一般に蛍光灯を使用しますが、蛍光灯は紫外線を放射し資料を劣化させるため、博物館ではこのハロゲンランプや紫外線をカットした蛍光灯を使います。

ハロゲンランプは一般の白熱電球よりも色温度が高いため、演色がよいのですが、紫外線を多量に出すため照射物の表面温度を高めてしまいます。このため紫外線の放射が少なくなるよう加工したものを使用します。

資料の保存の観点からは明るさを抑える必要もあり、資料を次世代へつなぐための保存、資料の価値を十分に鑑賞できる公開、この双方の観点を勘案しながら展示を制作します。白熱電球の生産は地球温暖化防止や省エネのため、3年の間に原則禁止され、近い将来たとえばLEDのような代替照明への切り替えが必要となります。



現在開催中企画展

第7回むかしのくらし展

「お店やさん—お買いものくらし—」

近所のお店やさんで買い物をしていた昭和初期から30年代の様子を紹介し、いとむかしのくらしを考えます。

【会期】2010年9月11日(土)~
12月5日(日)

休館日: 11/1(月)・4(木)・8(月)・15(月)・22(月)・
24(水)・29(月)

【観覧料】無料

次回企画展

「みなとびあ アンテナ 2010(仮)」

企画展示室を使って、資料の調査研究から公開までを紹介する、新しい試みです。

【会期】2010年12月18日(土)~
2011年2月11日(金・祝)

休館日: 12/20(月)・24(金)・27(月)~1/3(月)・
11(火)・17(月)・24(月)・31(月)・2/7(月)

【観覧料】無料

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマを、毎月第4日曜日にお話しします。

時間: 13:30~15:00

会場: 本館2階セミナー室

申込み: 当日受付、定員50人 資料代: 100円

■11月の講座: 11月28日(日)

「新潟の登場と蒲原・沼垂—中世文化財からの再検討—」

講師: 長谷川 伸

■1月の講座: 1月23日(日)

博物館と民俗学—新潟市域の博物館の歴史を事例として—

講師: 岩野 邦康

■2月の講座: 2月27日(日)

新潟市の水道敷設

講師: 若崎 敦朗

編集 後記

「帆樫成林」21号、いかがでしたか。表紙は、10月3日(日)にボランティアスタッフが中心となって行われた写生会「みなとびあで絵を描こう」(後援:新潟教育会美術賞実行委員会)で、こども部門のみなとびあ大賞となった作品です。この写生会は、絵を描くことを通じて、新潟港の歴史を身近に感じてほしいとの思いから開催されました。多くの方々の作品から、みなとびあを新鮮な目で見つめ直すことができました。(土田)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・

新潟市歴史博物館みなとびあ

住所: 〒951-8013 新潟市中央区南一宮町2-10

TEL: 025-225-6111 E-MAIL: museum@nchm.jp

休館日: 毎週月曜日、祝日の翌日

観覧時間: 9:30~18:00



地名と歴史

伊東 祐之

地名の由来

博物館でよく聞かれるけれど答えにくい質問に、地名があります。「その村はなぜ〇〇村なのか」「その山の名は由来は」「だれが名付けたのか」「池の名に由来は」「だれが名付けたのか」といった質問です。地名というのは特定の場所を示す固有名詞です。基本的には、その名を聞いた人々が、特定の同じ場所のことと分かり、その場所について互いにコミュニケーションを取ることで定着していったものなのです。多くは地形や特定のモノなどに基づいて、その場所を知っている人々が、その場所を示す名であると互いに納得できて決まるのでしよう。決まるまで長い年月を要する場合もあるでしょう。

地名決定の経緯を直接示す歴史資料や文献はないのが普通です。人々が語り継いできた地名に関する伝説は、その名の音韻、用字あるいは地形から連想して作られ、語られることが多いようです。住居表示のように行政的に決まるものもありますが、これもなぜその町名に決まったのかということがわかる資料が残っていることは多くありません。ですから地名について考える人は、同じような地名あるいは地名の一部が用いられている場所の地理的状況や社会的状況などを比べて、その地名の言語的意味を考察し、由来を推測するの

が一般的でしょう。例えば東区の「猿が馬場」の由来を考えるのに、各地にある「猿が馬場」という地名の付いた場所の地形を調べると、山中や小高いところにある平坦な場所という共通点があることが分かります。東区の猿が馬場も砂丘に平坦な場所があることから付けられたのだろうと推測する、といった方法です。

異なる呼び名

「宮浦」「居村」「川下」「一番割」など各村にある小字名は、村人が村内の場所を示すのに、地形や建物、社会的行為などに基づいて付けた呼び名でしょう。また村名は、村の立地や成り立ちの経緯に基づいて名付けたのでしよう。その土地に関わる地域の人々が名付けた名を、より広い地域の人や行政が認め、地名が定まっていきました。逆に行政が定めて人々に使用させることもありま。地名が広い地域の人の間で定まるまでには、同じ場所を隣村では別の名でよんでいたり、時代が移って名が変わったりすることがあります。場所と地名の一対一の対応関係が確定するまで、記録や記憶に残っていないことも、軒余曲折があるのが普通でしょう。いったん確定した名も政治的・社会的関係や自然環境の変動に対応して変化するのであります。



寛文十二年(1726)沼垂町移転をめぐって寛文十二年(1726)沼垂町の河口部分に「西川」と記載してあります。沼垂の西を流れているからでしょう。自分の町を中心に考えていることがわかります。同じ時期に新潟町が作成した地図には「信濃川」とあります。上大川前通という町名があるように、新潟町の人たちは通常は「大川」と呼んでいたと思います。



三平池の跡

変わる地名

地名が変わっていることが分かる例もあります。江戸時代初期に「本町通」「新

く、「五番堀」という名の影響を受けて、いつのころからか「御」が「五」と表記されるようになり、地域の人々の共通認識になったと思われま。

変化した小路の名で有名なのは「榎谷小路」でしよう。江戸時代には、本町通角(後に町会所となる場所)にあった小島家の屋敷にちなんで「榎屋小路」と呼ばれていました。明治中期になぜか「榎谷小路」と記載されるようになり、現在は「榎谷小路」と表記されています。

酒屋村、朝野村などが合併してできた両川村は信濃川・小阿賀野川にちなんで名付けられました。村ができたときには「フタカワ」と読むと定められていたました。しかし、そう呼ぶ人がいなくなったらしく、「リョウカワ」と呼ぶようになっていきました。新潟市中央区関原の町名「関原」は町名が決まったときは「セキナミ」と読むことになっていましたが、現在、「セキナン」と呼ばれています。

新潟市西区赤塚の「佐湯」は、かつて行政的に「サガタ」と呼ばれていたものでした。鳥屋野湯も福島湯も鶴湯も湯は「ガタ」と濁るので、佐湯も濁って呼んだのでしよう。しかし、赤塚の人々から自分たちは「サカタ」と清音で呼んでいるので、変更して欲しいという訴えがありました。市は江戸時代の絵図に「坂田湯」と表記されている絵図があることなどを確認して「サカタ」と呼ぶことにしました。「名目所」は一般的には「ナメトコロ」ですが、地域の人には「ナメトコロ」と呼んでいます。音と文字にずれがある例はたくさんあるでしょう。

古い地名と新しい地名、A村とB村の呼び名、行政的な地名と地域の呼び名、異な

る呼び名や文字があることをとらえて、どちらか一方が開通したとは言えません。行政や声の大きな人が決めれば、それが正しいというものでもないでしょう。

「新潟県」の命名

こうした地名の流動性、不明瞭さがあったうえで地名に注目すると、地名が歴史と深いかわりを持つていることに気付くことがあります。例えば「新潟県」です。平気で何の根拠も上げずに「県名は新しい湯」に由来するなどと書いてある本も出版されています。「新潟」について証拠を挙げて確かこうだとすることはできません。最も古い文書に「新方」とあることとや、新しいという意味でもなせ「ニイ」で「シン」や「アラ」ではないのかといった言語的意味を検討した上で推測すべきでしょう。「新潟」の由来についてはここで言及できませんが、越後・佐渡を管轄する県の名が、なぜ「新潟県」と命名されたかならば、当時の役人の手紙や意見書という資料があって、ある程度分かります。

それは、新潟町が県庁所在地になったからです。多くの県は江戸時代にも地域の政治・行政の中心であった城下町が県庁所在地になっていました。しかし、越後は長岡や高田や新発田ではなく、新潟町が県庁所在地になりました。戊辰戦争が決着を見ていない段階で、新政府は地方の直轄地を統治する府県を設置します。そのとき、安政の五か国条約の開港場を管轄する府を置いたのです。「長崎府」「神奈川府」「兵庫府」「箱館府」ともに新潟港を含む越後に「新潟府」を置き

には「鳥屋野湯」と記載されています。女池にとつては鳥屋野湯の前の湯あるいは村の前の湯という名付け方でしょう。小張木では連の生い茂る様からの呼び名でしようか。両村の境は湯の中であり、湯の利用をめぐって両村に競合関係があったことも想像できます。自分たちの村の地図には自分たちの呼び名を記載したのでしよう。また、女池新田の集落の北側には「男池」と「女池」がありました。この「女池」が村名の由来と思われま。この「女池」の人々は湯が埋め立てられる前には、「女池」を「三平池」と呼んでいました。現在は埋め立てられて三平池の跡が立っています。

が置かれたのです。ただし、戦時下の越後に置かれた「新潟府」は名前だけでした。その後、混乱が続く越後と開港場新潟をどう支配したらいいのか、新政府と現地で見解が異なり、越後の府県設置は軒余曲折します。戦乱に苦しんで治安が悪い越後と開港場を分離して支配する考えや、越後国全体の統治が重要という考えが重視されて、水原に府県庁を置く「越後府」や「水原県」が設置されます。結局、明治三(一八七〇)年に開港場新潟を県庁所在地として、蒲原山岩船岡郡の直轄地全域を管轄する「新潟県」が設置され、これが現在の新潟県につながります。県名としての「新潟」は新潟町が開港場になったことに由来するのであります。

地名の成り立ち・移り変わりと歴史

地名を考えるには、一般的な地理的・言語的な検討だけでなく、歴史的な検討が大切ではないかと思ひます。用字や音韻からだけの思いつきの推測による俗説は、地名の持つ本来の価値を損なうことになりかねません。何のために、だれが作成した、いつの資料にどのように記載されているのか、どのような時代、社会的背景のなかで、なぜ地名が必要となつて名付けられたのかを調べる必要があります。こうした検討を踏まえるならば、地名は、命名の経緯や託された意味、その後の変化も含めて、その地に生きた人々の思いや息遣い、土地の成り立ち、地域のたどった歴史などを伝えてくれる大切な遺産となるのです。

第7回むかしのくらし展 「お店やさん—昭和のお買い物ものたくらし—」

土田 可奈

日用品の買い物といえば、現在はスーパーマーケットや郊外の大規模店を利用することが多いと思います。しかし、昭和三十年代くらいまで、日用品は、専門店である近所のお店やさんを多く利用しました。今回のむかしのくらし展は、昭和初期から昭和三十年代までのお店やさんについて紹介しています。

展示は、お店やさんの売り方に焦点を当てた「お店やさん」、お客の買い方に焦点を当てた「お買い物もの」、同時代の買い物の場所として市場とデパートを紹介する「市場」「デパート」を中心に構成しています。以下、いくつかの展示を通して、本展を紹介します。

栄尋常小学校「弥彦旅行の記」

プロローグでは、昭和九年の栄尋常小学校の弥彦旅行の文集の中の、旅行準備のお買い物物の記述を通して、当時の買い物の様子を紹介しています。

購入場所への交通手段は徒歩のため、買い物をするのは近所のお店やさんが多かったこと、また、バナナを二〇〇目（匁）買う、といった記述から、はかり売りがされていたことが分かります。

興味深いのは、百貨店で買い物をするという記述です。文集は昭和九年のもので、新潟で最初の百貨店である萬代・小林ができる昭和十二年より前に、榮小の児童が百貨店と呼ぶ店があった

ということになります。もしかしたら、古町四番町にあった芳屋かもしれませんが、はつきりとは分かりません。

お店やさん

このコーナーは、お店やさんのつくりや、はかり売りの道具などを紹介しています。

店舗部分しかないスーパーマーケットなどとは違い、商品を売るスペースである「店」と、居住スペースである「家」とが一体化しているのがお店やさんです。新潟でよく見られる商家のつくりは、通りに面して店があり、その奥に居住空間があり、店と居住空間の横には幅一間ほどの土間が入口から建物の奥まで続いています。

電気冷蔵庫が普及していない昭和三十年代までは、生鮮食品は保存できないため、買物は近所で毎日するものでした。毎日顔を合わす店員は、同じ地区内の住民同士でもあります。加えて、はかり売りは、店員とお客とのコミュニケーションなしでは成立しません。お店やさんでの買い物は、店員とお客がお互いをよく知る関係になりやすいと言えます。

お買い物もの

お買い物もののコーナーでは、いろいろな買ひものの仕方を紹介しています。通い帳は、つけて商品を買う時に、お

店に持って行きました。お店で通帳に日付や商品名、値段を記入してもらい、登録やお米の取換時、月末などにまとめて代金を払いました。

御用聞きは、店員が家まで必要なものを聞きに来て、その商品を家まで配達してくれるというものです。味噌や酒などの惣、クリーニングや魚屋などの御用聞きもあつたそうです。

通い帳や、御用聞きなどは、店員がお客のことをよく知り、信用しているからこそ可能であつた買い方でした。

買ひもの変化とくらし

昭和三十年代後半からの自家用車の増加と、昭和四十年代以降に進む市街地の郊外化によって、日用品の買ひ物の場は、お店やさんから駐車場のあつた郊外のスーパーマーケットへと移り変わっていきまふた。お店やさんで見られた店員とお客との密接な関係性は、バック詰めされた商品をセルフサービスで買うスーパーマーケットでは見ることが少なくなりました。

本展を通して、お店やさんや買ひもの変化と、その背景にあるくらしの変化、店員とお客との関係性の変化などを考えていただければと思います。十二月五日（日）まで観覧料無料で開催しております。皆様のお越しをお待ちしています。

（つちた かな 学芸員）



お店やさん再現コーナー

はかり売りの道具などが展示されている

常設展示室から 日本海をはさんで 友好を育む四都市の風景

常設展示室から

当館の常設展示では「水」を切り口に歴史を紹介しています。そのため、水をイメージさせる演出が各所で行われています。展示室に入ると光による水の波紋が現れるのもその一つです。これは源流から流れ出る一滴の水を象徴しています。一滴の水が集まりやがて大河となって新潟市域を縫い日本海に流れ出る、その始まりを表しています。逆に展示室の出口部分では、波の音が聞えてきます。これは大河がたどり着いた日本海を象徴しています。



この波の音とともに、4つの映像が流れています。この映像では、川が

たどり着いた日本海の先にある対岸諸国の都市を紹介しています。いずれも新潟市と係わりの深い都市で、左側から韓国のウルサン市、中国のハルビン市、ロシアのウラジオストク市、そしてハバロフスク市です。ウルサン市とはスポーツを通じた交流協定を結び、ハルビン市とは友好都市、ウラジオストク市とハバロフスクとは姉妹都市関係にあります。しかも、ハルビン、ハバロフスク、ウラジオストクには新潟から直行便が就航しており、新潟は中国東北部や極東ロシアへの日本の玄関口にもなっています。

各映像とも、「鉄道の駅の様子」、「小学校の授業風景」、「家庭の食事風景」、「街のメインストリートの様子」、「水辺の公園の風景」が順番に映し出され、しかも各場面が同期して流れています。つまり、「小学校の授業風景」であ

れば、4台とも一斉に「小学校の授業風景」が流れる仕掛けです。日常の風景ながら、それぞれに共通点や違いが比較して見られる興味深い映像です。当館を訪れる外国人は中国・ロシア・韓国からの方が圧倒的に多く、これらの国のお客様にも楽しんでいただいています。

各都市と新潟市では、官民ともに交流が活発に行われています。これらの映像もこれまでの交流に支えられ、現地の方々との多大な協力を得ながら、当館の職員が現地へ赴き撮影してきたものです。近頃では、尖閣諸島の漁船衝突問題による中国との関係の冷え込み、新潟からのロシア直行便の休止など悲しい出来事が続いています。これまで築いてきた友好の絆を強くし、これからも交流を重ねていきたいものです。

小林 隆幸（こばやし たかゆき 学芸員）

おまけ

写真でつづる関屋界限 今、少しむかして

関屋映像研究会発行 二〇一〇年三月

地域の人々が自分たちの暮らす地域の歴史を学び、地域に関する本を編み、地域の将来を考へる活動が盛んです。かつて新潟市域では「越後木場の郷土誌」「鳥屋野地区の今昔」「西野の郷土誌」などが地域の人々によって刊行されています。最近では各地で多くの人が地域学の名の下に地域の歴史や文化、社会などについて幅広く学んでいます。なかでも関屋公民館を拠点とした活動は長く続いて、講座の記録をまとめ、平成十六・十七年には「ふるさと関屋」上下を刊行しました。そして、そのメンバーのなかから結成された関屋映像研究会が、「地域の映像の掘り起こし」「映像の記録保存」そして公開を目標に、多くの方々に訪ね歩き、多くの書籍を博覧して、関屋地区のたくさんの方々の写真や動画を掲載し、記述の裏付けとともに本にまとめあげました。学校町通、蔵所堀、大川前の工場、



収録されている蔵所堀の写真

関屋場、学校など、写真と記述の伝える情報は多く、ページをめくるのが楽しくなる一冊です。

（伊東 祐二 学芸員）

湊をめぐる研究課題——堀・船・荷

岩野 邦康

「湊町新湊」という語から連想するイメージといえば、白い帆に風をいっばいにうけた大型のベザイ船が、信濃川河口からまっすぐに湊に入ってくる様子や、日本海を往来する海のロマンに満ちた北前船なのではないかと思えます。しかし、新湊湊の具体的なメカニズムは分かっていることも多く、商家が軒を連ねていた江戸時代の商業のあり方についても、現在さまざまな研究が盛んに展開されている最中です。

今回の研究ノートでは、堀・船・荷という三つのキーワードから現在分かっている新湊湊の具体的な姿に迫りたいと思います。

湊町と堀 新潟・沼垂の二つの町は、いずれも堀の多い町でした。江戸・大坂などの巨大都市も堀が発達し、時代劇などにもよく登場することから、湊町にも堀が必ずあると考えがちですが、これらの町は大川の河口に立地するという共通点ももっています。江戸時代の湊町でも大川の河口に立地しない湊には堀を設けないところが少なからずあり、新潟県内でも小木、出雲崎、今町(直江津)などは、新湊湊の様には堀をめぐらせていません。堀割を設けている湊町には、青森町(青森県)などがありますが、新

湊・沼垂に比べて堀の数は多くありません。これらの比較から、信濃川河口の新湊・沼垂は、その地形条件を生かして堀を発達させた町ということが出来ます。

新湊湊の船 堀が整備された新湊町では、船が様々な荷物を運ぶ物流の基幹を支えています。イタアワセと呼ばれる小型の川船は、新湊町では暮末頃には約五百艘ほどありました。イタアワセは、周辺の農村部でもひろく使われていて、大根などの野菜を町中で販売する際に利用されていました。

信濃川や阿賀野川の上流からは、長船や船などの小屋掛けを設けた大型の川船が、何日もかけて川を下ったり上ったりしていました。

河口から海にかけては、天渡船と呼ばれる水押(船首の構造材)のある船や、チョロと呼ばれる木を削った部材を使った船などが、漁業や小規模の商売に使われていました。

江戸時代の海運を支えたベザイ船にも大小さまざまなサイズがありました。大型のベザイ船は、直接川岸に接岸できないため、信濃川の中央部や沖に停泊し、積み荷を小型のベザイ船や天渡船などに積み替える「瀬取」作業をおこなって、町の中に運び入れています。これ

らの作業は「艇下仲間」「天渡船持」と呼ばれる人々が行っていました。

「艇下仲間」の使う船は小型のベザイ船で、短距離海運を指す「小廻し(小回り、地廻りとも)」に使う船とほぼ同じサイズでした。小型のベザイ船は新湊町の大きな堀になり、直接乗り入れることもできたようです(写真:堀に停泊する小型のベザイ船)。

湊における荷の動き 新湊湊における船の積み荷の動きを考えると、キーワードとなるのは、前述の「瀬取」の作業と、「小揚」と呼ばれる人々が行う、「水揚」「陸揚」「蔵出」などの作業の名前です。水揚は船から蔵まで積み荷を運ぶ作業、陸揚は荷物を陸路で運ぶ作業、蔵出は蔵から荷物を船に積み込む作業をさします。これらの作業はそれぞれに細かく料金が設定されていました。また、小揚の人たちは、荷物の梱包作業や御米の瀬取も担当していたようです。これらの荷をめぐる細かい作業があっただけで、湊町は機能しました。

江戸時代の日本を考える上で、湊町新潟が鍵になる重要な都市であることは間違いなく、歴史研究が展開することによって新しい新潟の姿がみえてくるという点

が、新潟市の魅力だといえるでしょう。みなとびあでは、江戸時代から明治時代にかけて、様々な船が往来した新湊湊の具体的な姿について、今後も研究をすすめていきます。

(いわの くによす 学芸員)



學而時習之

二〇一〇年七月七日から二泊三日、「平成二十二年度博物館長研修」(文科省国立教育政策研究所社会教育実践研究センター主催)に参加しました。くれぐれも健康に留意され、と挨拶されて、六つの講義、二つの研究協議がハードに進められました。

博物館をめぐる財政逼迫の厳しい情勢、そのもとでも果敢に博物館のあるべき歩をおい、かつ成果をあげている内外の事例が語られたことには大いに視野が広がる思いがしました。また松戸の宿舎での夜の自主交流に加わって、年甲斐もなくいささか気持ちも高ぶり、はじめての方たちに親密さを覚えるなど有意義なものとなりました。

参加にあたって事前や事後のレポート提出のおまけもありました。研修の成果をどう実践につなげますかという事後レポートに、私は「当面試みたいことは、第一

にこれらを総体に扱う理念の共有が太い柱となるように、まず館の学芸・企画普及の皆さんとともに議論を進めたい」と、理念の共有」という提言を受け止めていたことを記したわけです。

それは、話をここで始めて聞いたからというわけではなく、すでに十年以上も前の大学改革の議論の折に気になりながら果たせなかった折に、実践してみても有意義だったと話を直接聞いていたためでした。これに習おうと思っております。

「みなとびあ」の理念を理解するよう心がけますと、設置条例第一条「新潟市の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めると共に、歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会活動及び文化活動に寄与することを目的とする」と、さらに第二条の目的達成に向けた六つの事業に、まず目がむきます。

この条例は、根本に置かれるものですが、なお博物館活動と市民生活との実際の関係を市民の視点で述べたものと考えますと、まだそれをもっていないことになり、館のスタッフたちが日常の指針とする「行動綱領」もまだもっていないことに気づきます。

館長日記

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二



「みなとびあ」の理念を理解するよう心がけますと、設置条例第一条「新潟市の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めると共に、歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会活動及び文化活動に寄与することを目的とする」と、さらに第二条の目的達成に向けた六つの事業に、まず目がむきます。

収蔵資料紹介

木下秀一郎(一八九六-一九九二)「報時塔」(一九二四年、カンバス油彩)

大正時代に(未来派)を名乗った若い美術家たちは、このほか「速度」という要素を重んじました。未来派とは、二十世紀はじめのイタリヤとロシアで興った芸術運動で、伝統の破壊と、機械文明の賛美という(反)芸術的傾向を特徴としていました。偉大な文学は象形文字よりわかりにくい、ギリシャ彫刻よりも自動車のほうがカッコいい、という確信犯的な思想が、ユーラシア大陸を東進し、ウラジオストクから日本に上陸します。「醒めよ」と首都東京で叫ばれたのは、一九二二年のことでした。

この未来派を受容し、波及させた美術家たちの中心部に、木下秀一郎がいました。木下は、福井市に生まれ、東京で医学を学びながら、未来派の動きに加わり、東京で「三科インデペンデント展」を立ち上げます。一九二三年にはロシア人作家ダヴィッド・ブルリユークの講演をもとに「未来派とは?答へる」を刊行。これが大正期新興美術家たちの必読書となりました。「吾々は迅速である。」という木下が、蒸気機関車のごとく疾走した時代でした。

木下は、一九二四年の秋に初めて新潟を訪れます。本作品は、その時に描かれた油彩のスケッチです。「報時塔」は、大正から昭和にかけて、いまの大円寺公園から新潟の空に

時の音を響かせた建物です。圧縮空気で汽笛を鳴らす、いわば新潟の近代化を象徴する建造物でした。とかく絵になりにくい同時代の人工物を、木下は水や空と同じ関心の目をもって、街の空気に溶かしています。翌年、木下は新潟医科大学の皮膚科に副手として入局します。ここで博士号を得るまでの八年間、新潟の人となつて、市井の人々の生活風景を多くのスケッチに残しました。しかし、未来派の先鋭的な活動から、木下はすでに離れた場所を歩き出していました。「速度」を追いかけ、掴んだつもりの中にも、あるいは「時の静さ」をみたのかも知れません。報時塔は、戦渦の中で声を失い、一九六一年に、その姿を消しました。(木村一頁 学芸員)

